公益財団法人東京都人権啓発センター 理事長
三枝健二　様

飯山由貴氏《In-Mates》上映不許可に対する意見書

2023年3月21日
美術評論家連盟
会長　四方幸子

東京都人権プラザ（公益財団法人東京都人権啓発センター）にて開催された飯山由貴氏の企画展「あなたの本当の家を探しにいく」（2022年8月30日-11月30日）における飯山氏の映像作品《In-Mates》の上映不許可に対し、美術評論家連盟は強く抗議します。

2022年10月には作者、出演者、賛同者が記者会見で指摘したように、この上映不許可は当初、作品内で言及のある関東大震災時の「朝鮮人虐殺を『事実』とすることに懸念」があることが理由のひとつとされていました。しかし、作者らの記者会見と同日に送付された東京都の説明文書では、朝鮮人虐殺が理由であること自体も隠蔽しようとしたものになっています。歴史的な事実を認めようとしないばかりか、都知事への配慮によって作品を検閲する組織体制は極めて不適切であり、一連の都の対応はさまざまな差別の助長に繋がりうるものです。

「あいちトリエンナーレ 2019」における「表現の不自由展・その後」の中止の際にも議論されたように、上映不許可の措置が公的組織や個人を萎縮させ、表現の自由を脅かしていることを私たちは深く憂慮しています。表現の機会を与えるということは、その表現に賛同することを意味するものではありえません。公的組織が、自らにとって不都合な意見を拒絶し、市民による自主的な鑑賞と判断の機会や権利を奪うことはあってはならないことです。こうした対応はまた、公的組織の正当性そのものを脅かすことに繋がりかねません。

上映不許可となった《In-Mates》は、戦前に東京の王子脳病院に入院していた朝鮮人患者たちの看護日誌に基づく映像作品です。自身も在日コリアン2.5世である詩人・ラッパーのFUNI氏が、この日誌をもとにパフォーマンスをしています。日本において、マイノリティであることを余儀なくされる人々の人権をあらためて考え直そうと試みたのが本作の背景であり、本作が東京都人権プラザで上映されることは全く妥当なことだと言えます。

作中の「俺は日本人だから朝鮮人は全員抹殺だ」「俺は日本人だから朝鮮人は一人残らずぶっ殺してやる」「俺は朝鮮人だから殺してくれ」といったFUNI氏のセリフは、歴史的にそのような会話がなされるような社会に暮らし、絶えず差別を受けていた朝鮮人たちの生を、FUNI氏が自身に重ね合わせながら口にされるものであり、決して「ヘイトスピーチ」ではありません。

また、こうしたセリフは看護日誌の記述に基づくものです。過去を過去のものとせずに、現在と地続きのものとして「再演」することは、批評的な視座をもつ表現方法のひとつです。「一部が切り取られれば誤解を生む」という懸念も、上映会や関連トークイベントのなかで実際的に対処できるものであり、検閲の正当化に過ぎません。

私たちは、東京都人権プラザが長きにわたり、人権啓発のための拠点施設として、人権に関する教育・啓発及び人権の擁護等の事業を実施してきたことの重要性を深く認識しているとともに、飯山氏の企画展開催についても、大変重要な取り組みであったと考えています。東京都人権プラザには、社会に積極的に働きかけようとする表現者たちの切実な実践を、今後も継続的に紹介し続けてほしいと願っています。そして、私たちは本問題の推移を注視し、《In-Mates》が正当に上映されること、そして、そのことが当然のように受け止められる社会環境が取り戻されることを強く望んでいます。

東京都知事
小池百合子　様

飯山由貴氏《In-Mates》上映不許可に対する意見書

2023年3月18日
美術評論家連盟
会長　四方幸子

東京都人権プラザ（公益財団法人東京都人権啓発センター）にて開催された飯山由貴氏の企画展「あなたの本当の家を探しにいく」（2022年8月30日-11月30日）における飯山氏の映像作品《In-Mates》の上映不許可に対し、美術評論家連盟は強く抗議します。

2022年10月には作者、出演者、賛同者が記者会見で指摘したように、この上映不許可は当初、作品内で言及のある関東大震災時の「朝鮮人虐殺を『事実』とすることに懸念」があることが理由のひとつとされていました。しかし、作者らの記者会見と同日に送付された東京都の説明文書では、朝鮮人虐殺が理由であること自体も隠蔽しようとしたものになっています。歴史的な事実を認めようとしないばかりか、都知事への配慮によって作品を検閲する組織体制は極めて不適切であり、一連の都の対応はさまざまな差別の助長に繋がりうるものです。

「あいちトリエンナーレ 2019」における「表現の不自由展・その後」の中止の際にも議論されたように、上映不許可の措置が公的組織や個人を萎縮させ、表現の自由を脅かしていることを私たちは深く憂慮しています。表現の機会を与えるということは、その表現に賛同することを意味するものではありえません。公的組織が、自らにとって不都合な意見を拒絶し、市民による自主的な鑑賞と判断の機会や権利を奪うことはあってはならないことです。 こうした対応はまた、公的組織の正当性そのものを脅かすことに繋がりかねません。

上映不許可となった《In-Mates》は、戦前に東京の王子脳病院に入院していた朝鮮人患者たちの看護日誌に基づく映像作品です。自身も在日コリアン2.5世である詩人・ラッパーのFUNI氏が、この日誌をもとにパフォーマンスをしています。日本において、マイノリティであることを余儀なくされる人々の人権をあらためて考え直そうと試みたのが本作の背景であり、本作が東京都人権プラザで上映されることは全く妥当なことだと言えます。

作中の「俺は日本人だから朝鮮人は全員抹殺だ」「俺は日本人だから朝鮮人は一人残らずぶっ殺してやる」「俺は朝鮮人だから殺してくれ」といったFUNI氏のセリフは、歴史的にそのような会話がなされるような社会に暮らし、絶えず差別を受けていた朝鮮人たちの生を、FUNI氏が自身に重ね合わせながら口にされるものであり、決して「ヘイトスピーチ」ではありません。

また、こうしたセリフは看護日誌の記述に基づくものです。過去を過去のものとせずに、現在と地続きのものとして「再演」することは、批評的な視座をもつ表現方法のひとつです。「一部が切り取られれば誤解を生む」という懸念も、上映会や関連トークイベントのなかで実際的に対処できるものであり、検閲の正当化に過ぎません。

私たちは、東京都人権プラザが長きにわたり、人権啓発のための拠点施設として、人権に関する教育・啓発及び人権の擁護等の事業を実施してきたことの重要性を深く認識しているとともに、飯山氏の企画展開催についても、大変重要な取り組みであったと考えています。東京都人権プラザには、社会に積極的に働きかけようとする表現者たちの切実な実践を、今後も継続的に紹介し続けてほしいと願っています。そして、私たちは本問題の推移を注視し、《In-Mates》が正当に上映されること、そして、そのことが当然のように受け止められる社会環境が取り戻されることを強く望んでいます。